

信仰成長の三側面

(ルカ一五・一一〜三二)

「大坂先生も中堅ですね。働き盛りですから頑張ってください」と言ったコメントを聞くことが増えた。齢四十八にして漸く「若手」脱出である。アイドルのように「若さ」や「未熟さ」からくる「カワイイ」が武器になる場合は、実年齢から一、二歳サバ読みをしてデビューさせたりするのもさほど珍しいことではないらしいが、宗教学の場合やはり成熟、円熟しているほうがいいというのが通り相場。若いというのはマイナスなのだ。

閑話休題。今朝の箇所は円熟した伝道者パウロがその伝道旅行に帯同させた直弟子のテモテに対する指導であり、第一義的には伝道者が持つべき資質について語られている箇所である。しかしこの箇所からクリスチャンの信仰成長の三つの側面を考えることもできる。今朝は以下その三つを見ていきたい。

一、道徳的側面

「年が若いからといって、誰にも軽く見られないように」という注意をし

たあとで、パウロはテモテに対し信徒の模範となることを要求している。模範と訳された言葉は「手本」や「見本」を表す言葉である。手本や見本となるからにはその人がある意味で「標準的」でなければならぬ。以前派遣実習に来ていた神学生に説教のイロハを教えることがあったが、その際最も大切にしたことの一つは「標準的」であることであった。書道なら王羲之、柔道で言えば「打ち込み」などの基本動作を正確に行うことによつて成長は保証される。信仰も同じである。実際に語られる言葉、行い、愛、信仰、純潔と言った道徳的な面において成長していくことが大切なのである。そしてその模範となる人の模範、いやすべてのクリスト者の模範こそ、実にイエス・キリストその人なのである。「イエスを高き則として(聖歌五一)」「真実全き心もて」とある通りである。

二、教理的側面

続いて命じられていること、それは聖書の朗読と勧めと教えに専念することである。学者たちの見解ではこの聖書の朗読と勧めと教えとは公同の礼拝に深い関係があるということである。確かに今日に至るまでキリスト教の礼拝にはみことばの朗読とそれを基にした勧めと教えが連綿と

続けられている。パウロはテモテにそれに専心するように勧められているのだ。ちなみにこの「専念する」と訳されていることは四・一における「心を奪われる」と同じことばである。だからクリスチャンが成長するためには何よりも礼拝におけるみ言葉の朗読とその解釈とそこから導き出される健全な教えに心を向け、魅力を感じ、熱心になりたい求めることが大切なのだ。もちろん教会に来て主にある兄弟姉妹の交わりを楽しむことは良いことである。しかしそれが主になつてしまい、礼拝がいい加減になり聖書や説教に対する理解が乏しいといふのであれば成長はおぼつかない。熱心にみことばに聞き、神のおしえを学ぶことは本当に大切なのだ。

三、実践的側面

第三に言われていることは与えられた御霊の賜物を軽んじてはいけないということである。テモテは長老からの按手を受け、牧会者としてよく仕えることが出来るよう、聖霊の賜物が与えられていた。パウロは若く、時には軽んじられたりして苦境に立つこともあったろうこの若い伝道者に「君には牧会を行っていく力はすでに与えられているのだ」といつて励ましているのだ。しかしよく考えると聖霊の賜物が与えられるのは何も牧師や司祭だけではな

い。ペンテコステの日以来、聖霊の賜物は主の教会を建て上げるために、すべての人に与えられるようになったのである。しかも聖霊の賜物は決していわゆる超自然的なものだけに限定すべきでもない。それはロマ二二章の賜物のリストの中に「奉仕」や「教え」「慈善」「分け与えること」など、すでに与えられている能力と考えてよいものも含まれていることからわかる。だから自己卑下はいけない。それは主の与えた賜物を軽んじることになる。与えられたタラントを生かし実践する。ここにも霊的成長の一面があるのだ。

* * *

自動車関連のレビューサイトを見るとよく用いられているのがスパイダーチャート。外装4、乗り心地5、価格3、満足度5と言った具合にして対象の全体像を表現するのに用いる図であり、その理想は全体がまんべんなく広がっている状態であろう。キリスト者の成長も同じだ。奉仕は一生懸命でも礼拝はいい加減ではだめだし、教理に通暁していても道徳的に問題があればだめだ。先ほども言ったが、クリスチャンの成長の究極のモデルはイエスご自身であり、イエスは全方位的、ホリスティックなお方であった。我々もそのように成長していきたい。アーメン。